

中東交流強化事業

2001年9月11日の米国同時多発テロ以降、中東地域諸問題が国際秩序に与える重要性の認識が世界的に高まってきた。そのような情勢下において、国際交流基金では、わが国と中東諸国の高度な相互理解を増進し、日本と中東諸国との安定した関係を構築・維持していくことが重要であるとの認識から、日本語教育、日本研究、日本文化の紹介を中心とする既存事業に加え、中東地域との知的対話、文化協力、日本における中東理解促進等を核とする中東交流強化事業を2003年度より開始した。また、これらの新規事業を実施するために、2003年1月に中東交流事業業務室が設置された。

1. 知的交流セミナー・会議等開催(中東)

<2003年度事業例>

● 対中東地域文化交流・対話ミッション

2003年9月19日～10月1日、日本と中東地域との文化交流を強化・発展させるため、日本の有識者から構成されるミッションを組織し、サウジアラビア、イラン、シリア、エジプトの4か国を訪問した。ミッションの参加者は山内昌之氏(団長、東京大学教授)、根本二郎氏(最高顧問、日本郵船名誉会長)、森英恵氏(デザイナー)、森本公誠氏(東大寺上院院主)、北岡伸一氏(東京大学教授)の5名で、訪問先では、「伝統と近代化」のテーマでシンポジウムを実施したほか、知識人・文化人・宗教関係者等との幅広い分野にわたる意見交換を行なった。その模様は現地メディアでも広く紹介され、中東諸国の文化や社会に対する日本の高い関心をアピールした。

● シンポジウム「日本と中東・イスラーム世界：共生の時代」

2004年2月16、17日に、日本、サウジアラビア、トルコ、イラン、タイから有識者の参加を得てシンポジウムを東京で開催し、これからの日本と中東・イスラーム世界の交流のあり方について2日間に渡って討議した。1日目は、「メディアの役割とは何か：日本と中東の相互理解に向けて」「日本と中東地域の交流のあり方」の2テーマについて、2日目は、「文化と社会：共有と相違、そして相互理解に向けて：メディアの視点から」「拡大する女性の役割」「識者・専門家の提言：日本と中東地域との交流のあり方」の各テーマについて活発な議論が繰り広げられた。当日の様子はNHK衛星テレビ番組として放送された。

参加者(順不同)：脇祐三氏(日本経済新聞)、山岸智子氏(明治大学)、ジャマル・カショギ氏(駐英サウジアラビア大使館メディア顧問、サウジアラビア)、ナジブ・エルカシュ氏(フリーランスジャーナリスト、シリア)、目黒依子氏(上智大学)、塩尻和子氏(筑波大学)、ソルマズ・ウナイドゥン氏(駐日トルコ共和国大使、トルコ)、アレズ・ファクレジャハニ氏(東京工業大学博士課程、イラン)、内藤正典氏(一橋大

学)、ウサマ・クルディ氏(サウジアラビア諮問評議会議員、サウジアラビア)、イブラヒム・オズトゥルク氏(マルマラ大学、トルコ)、バンサック・ヴィンヤラトウ氏(首相首席政策顧問、タイ)

● 中東女性グループ招へい

2004年3月2日～3月15日、イラン、トルコ、エジプト、アラブ首長国連邦、オマーンの女性雑誌編集者・記者8名を招へいし、専門家らとの意見交換会のほか、大阪と東京で2回パネル・ディスカッションを実施した。同ディスカッションでは、各パネリストが手がける雑誌を紹介し、自らの仕事と経験を通して中東諸国の女性を取り巻く多様で変化に富んだ状況を描き出した。

2. 次世代招へいフェロシップ(中東)

<2003年度事業例>

イブラヒム・オズトゥルク氏(トルコ・マルマラ大学経済学部準教授)、アラー・エッサム・エルシャズリー氏(エジプト・カイロ大学政治経済学部)、オフラ・ゴールドスタイン・ジドニ氏(イスラエル・テルアビブ大学社会人類学副教授)の3名を各3か月間招へいし、それぞれの研究分野における日本と中東諸国の知的交流・対話の促進に寄与した。また、イブラヒム・オズトゥルク氏は、講演会「日本トルコ：中央アジア間に存在する認識ギャップを問う」およびシンポジウム「日本と中東・イスラーム世界：共生の時代」にスピーカーとして講演するなど、機会をとらえてわが国と中東イスラーム地域との知的交流に積極的に貢献した。

3. 日本のイスラーム学の対外発信

日本のイスラーム研究者を諸外国へ派遣し研究成果を発表する機会を設けることにより、わが国のイスラーム学の対外発信を強化し、もって世界におけるイスラーム理解の向上に貢献する。

<2003年度事業例>

● 「21世紀世界における日本の中東研究」

日本における中東研究の現状についての調査報告を、2003年度北米中東学会(11月6～9日、アンカレッジ/米国)で発表する日本中東学会員の研究者6名の派遣を助成した。派遣研究者は三浦徹氏(お茶の水女子大学)、臼杵陽氏(国立民族学博物館)、大塚和夫氏(東京都立大学)、鷹木恵子氏(桜美林大学)、山岸智子氏(明治大学)、赤堀雅幸氏(上智大学)で、テーマは3パネルあり、東アジアの中東研究、世界の中東研究の現状：グローバル化にむけて、現代ムスリム社会における境界性であっ

た。これらのパネルに対し企画参画、報告・討論実施、調査報告・成果物を作成配布したことで、日本による中東研究のプレゼンスとその水準を示すことができた。

4. 文化財保存支援(中東)

<2003年度事業例>

- 「アフガニスタン、明日へつなぐアーティストたち：絵画・工芸&フォトレポート」(2003年11月20日～12月3日、東京・国際交流基金フォーラム)

カブール市内のストリート・ワーキング・チルドレンが作成した絵画工芸作品の展覧会を開催した。また、展覧会では写真家・内堀たけし氏によるアフガニスタンの町、農村、学校等の写真も展示し、同氏を交えてのフォト・ディスカッションを開催した。来場者からは、一般報道では紹介される機会の少ないアフガニスタンの人々の暮らしや笑顔、豊かな自然や文化に触れることができたとの感想が多く寄せられた。

5. 中東文化芸術紹介

<2003年度事業例>

- 国際交流基金中東理解講座

2004年1月～3月、東京・国際交流基金国際会議場において「イラクを知ろう」および「イスラームが問題なのか？～近代化との関係を考える～」の2つの公開連続講座を実施した。「イラクを知ろう」は大野元裕氏(中東調査会)をコーディネーターに迎え、岡田保良氏(国土館大学)、片倉邦雄氏(大東文化大学)、星野守氏(三菱商事)、勝俣郁子氏(ジャーナリスト)の計5名の講師によって世界中の注目を集めるイラクの政治・社会状況、歴史や文化を紹介した。飯塚正人氏(東京外国語大学)のコーディネートによる「イスラームが問題なのか」では、政治や経済、女性の社会進出、人間の安全保障など、「近代化」にまつわる諸問題とイスラームとの関係を同氏のほか、白杵陽氏(国立民族学博物館)、松永泰行氏(日本大学)、加藤博氏(一橋大学)、黒木英充氏(東京外国語大学)、山岸智子氏(明治大学)計6名の専門家が講義し、いずれの講座も時宜を得たテーマの講義であると注目を集め、多数の受講応募があった。

●「イラン文化週間」

2003年5月に東京・国際交流基金フォーラムで開催されたイラン文化週間(主催・日本イラン協会、駐日イラン大使館)の開催に協力した。伝統音楽演奏、映画上映、講演会(イラン学、イラン細密画、イラン考古学、ペルシャ語・書道)、工芸品展示等の多彩なプログラムが目目され、多数の入場者を集めた。

●「イスラエル舞台芸術視察団派遣」

2003年12月にイスラエルの舞台芸術の日本への紹介の促進を目的として、同国の現代舞台芸術紹介フェスティバル“Curtains Up”に、日本の舞台芸術関係者8名(団長：永井多恵子世田谷パブリックシアター館長)を派遣し、上演作品の視察と演出家等関係者と意見交換する機会を提供した。

●「東京国際芸術祭/中東3カンパニー招へい公演」

2004年2月12日～3月28日に開催された東京国際芸術祭のプログラムとして、クウェート、レバノン、パレスチナの現代演劇3カンパニーの招へい公演を実施した。上演作品はいずれも、世界の国際フェスティバルから招へいされ、数多くの賞を受賞し極めて高い評価を受けている作品であり、日本公演も評論家、来場者から好評を得た。

	上演作品	劇 団
クウェート	「アル・ハムレット・サミット」	スレイマン・アルバッサム・シアターカンパニー
レバノン	「FaceA/FaceB」 「BIOKHRAPHIA - ビオハラフィア」	ラビア・ムルエ&リナ・サーネー
パレスチナ	「アライブ・フロム・パレスチナ - 占領下の物語 -」	アルカサバ・シアター